本の紹介

藤岡換太郎・原田憲一著「扇状地の都－京都をつくった山・川・土」

小さ子社，208p，2024 年 10 月 25 日発行
2,200 円（税別），ISBN978-4-909782-24-3

京都をこよなく愛する二人の京都人が，「京都が都として千年も続いたのはなぜか」という問いに地球科学者として挑み，紐解いてみた．本書は「京都・奈良は扇状地（山間盆地），他の都，例えば東京は，三角州（海岸平野）であること」をこの問いの基本的な答えとしている．タイトルの所以である．著者たちに導かれて，順々と読んでいけばいいのだが，京都に住んでおられる方，京都をよくご存知の方々は，ふんふんと読んだらよいし，京都に住んでいない方，京都を知らない方々は，おらが町の不思議を同じように地球科学から解くことができるだろうかという問題意識をもたれて読まれたらよい．

京の都を地球科学から解析しようとした類書を評者は知らない．本書では謎解きは最初の 3 章で，地球科学，災害，資源の視点からなされ，その後，著者二人の対談と終章となる．そしてどうせ解析するならばと，空間軸は日本列島の中の近畿とし，その地勢，地形，地質の時間軸を目いっぱい長くとる．著者たちの本音は地球創成から書き始めたいようだが，少し短くして，近畿の地質の変遷を，舞鶴帯／丹波帯／花崗岩マグマの貫入と熱変成（比叡山と大文字山）／東アジア東縁部の分離と日本海の拡大／地塁・地溝構造の形成／大阪層群の生成／盆地や平野，扇状地の形成として説いている．ここがちょっと難しい．ついうっかりと，舞鶴帯が京都になんで関係するのかとつぶやいてしまったりする．長い時間をかけて京都が形成されてきたので，うんと昔から説かなければならないのだと，著者たちに 1 歩譲ろう．日本史の授業などで考えるような，人間が出現してからの歴史などより，桁外れて長い時間軸を大地は持っているのだと考えていこう．これが新しい京都観を作っていく基本である．

第２章「災害が京都にもたらしたもの」に入ると比較的理解は楽になる．京都を襲った地震をまず述べ，京都を襲った地震以外の災害としては，火山被害／台風・大風被害／洪水や地滑り／火災を述べているが，なべて，東京よりはずっと少ないのだ．

地盤の面でも京都と東京は大きな違いがある．本書の回答部分が展開される．扇状地である京都は砂礫層が主体なので地震になっても液状化や地盤沈下などは起こりにくい．京都は河川の規模も小さいので洪水の範囲も限定的となる．それに対して，東京は，海に面した三角州で，含水率の高い砂泥質の沖積層が主体なので，地震が起こると液状化や地盤沈下などが広範囲に生じる．また河川が氾濫すると被害は広域に及ぶ．

著者らは，『方丈記』を例に挙げて，京都の過去の災害を知り，そして災害だけではなく，その恵みを記することを忘れず，京都の長い都の歴史を導けるという．

第３章「京都の文化を支えた資源」もより具体的だ．京都は，水もいいし，酒もうまい．扇状地のおかげだ．水がいいので，森がいいから木材も入手しやすく，木材を運ぶルートも整備されており，魚（淡水魚），京野菜，マツタケ，タケノコと，みんなうまいではないかと畳みかけている．陶土もいいし，岩石資源もいい．京都の庭園芸術は豊富な岩石資源によると説く．第 1 章で触れられているが，京都には鉱山もたくさんある．これらの資源をもとに，伝統産業が生まれていると説く．東京には伝統産業が育っていないではないかとまで主張する．（この章では表に出てこないが，京都のよさは，みんな京都の地球科学的立地条件から導かれていると著者たちは説きたい．）

それぞれの地域の地盤特性や資源の賦存状況を正しく評価するには，地域住民が足元の地質を理解することが不可欠であり，だからこそ，著者たちは本書を公刊したという．国民の地学リテラシーの高さが過疎化を排し，人々の生活に幸せを導くと著者たちは説く．

（東京都立大学　矢島道子）

2024.11.5 **受付**
2024.12.9 **学会ニュースレーター公開**
2024.12.7 **学会ホームページ公開**